

いのち輝くいつせの里

前山小学校 校長日より

令和5年10月20日

文責 植木政行

『前山の郷愁に浸る』 中央競馬・栗東トレーニングセンター 騎手 荻野琢真

前山小学校が来年の3月で閉校する。

閉校記念事業実行委員会の栗原君から、この原稿を依頼して貰ったと同時にその話を聞き、驚きと共にとても寂しい気持ちになりました。

今は、前山を離れていますが、年に1~2度程実家に帰ると、今でも当時の事を思い出します。

私は平成7年に前山小学校に入学しました。

1クラスだった為、同級生の子達とは6年間ずっと一緒だったので、みんなとても仲が良かったです。

よく友達の家遊びに行ったり、公園や山、川等、前山の豊かな自然の中で日が暮れるまで遊び回ったりしていました。

片道30分の通学路も遊び場で、おおぼこ相撲や、笹舟作りをしたり、イタドリを齧(かじ)ったりしながら帰っていました。

前山の自然と言えば、校外学習の一環として「すこやか水田」での田植え。土手の修復や除草、稲刈り、そしてそのお米で作る餅つき大会。

「すこやか水田」を通じて稲作を体験できました。

その時に書いた米作り作文を青少年の主張大会で発表出来たのは、いい思い出です。

その「すこやか水田」の取り組みが今でも続いていると聞き、竹山小学校になっても是非続けて貰いたいと思います。

今回このお話を頂いて、植木校長先生と打ち合わせの為、二十数年ぶりに前山小学校を訪れました。

今の校舎は、新しくなっていたため分かりませんが、植木校長とお話していると、教室の場所や職員室、音楽室に図書室等々、旧校舎での思い出が洪水のように記憶の中に溢れかえってきました。

中でも、面白かったのが、授業中ふと窓の外を見ると苜蒲谷池の前の道をイノシシの親子が走っていたのを見つけ、大声で周りに呼びかけましたが、その時には、走り去った後。

みんな嘘だと信じて貰えず、先生に授業中は静かにしなさいと怒られ、しょんぼりしていると、そのイノシシ親子がなんと校庭に入って来てそのまま校庭裏の畑で育てていたサツマイモを食べていました。

今考えると、自然溢れる前山ならではのエピソードだなと思います。

行事では、運動会が1番好きでしたね。

体を動かすのもそうですが、父親や母親と一緒にリレーに参加し、その後校庭で、家族みんなで母親の作ってくれたお弁当を食べるのが何よりの楽しみでした。

また小麦粉の中から手を使わずに飴玉を探す競技があり、顔を真っ白にして帰ってくると、両親が大笑いしてくれて嬉しかった事を覚えています。

今回、閉校記念事業の一環としてこの記事を書かせて貰い、寂しい気持ちと懐かしい気持ち、そして前山の素晴らしさを改めて感じる事ができました。

みんなの思いが詰まった前山小学校ですから、きっと素敵な閉校式典になると思います。

そして、ありがとう自慢の母校、前山小学校150年間お疲れ様でした。



仲が良かった同級生



青少年の主張大会で作文発表



運動会 飴玉GET

『前山小学校の思い出』 丹波市立前山小学校閉校・再出発記念事業実行委員会
記念誌事業部 副部長 近藤諒

2000年4月、前山小学校へ入学した私は、漫画を描くのが大好きで、球技が大の苦手、おとなしいけど目立ちたがり屋な少年でした。

当時を思い返すと、断片的だけどはっきりとした記憶が自分でも驚くほどたくさん蘇ってきました。給食で出る半分凍ったゼリーが美味しかったこと。近所の上級生と近道をして帰ったこと。風邪で学校を休んだ時にNHKを見るワクワク感。傘で彼岸花を叩き切った感触などなど。

特に、怒られたことは鮮明に覚えているもので、私が3年生のころ、給食の時間に当時はやっていたアニメのどうしようもなくふざけた曲を放送で流すといつてもない暴挙に出たことがあり、放送室に先生が走って止めに入ってきたことを覚えています。もちろん怒られました。ですがあの時、なぜか達成感があったことも事実で、最近再会した先輩に、私について印象に残っていることとして話題に挙げられるほどでした。

もう一つ怒られたエピソードとして覚えているのが、下校中、道沿いになっていたスモモの実を、それが他人の家のものだとは露知らず、友達と一緒に全て食べてしまったことがありました。後日、学校へ所有者の方から電話が入りました。担任の先生からその時に受けたお叱りの言葉「全部食べたならアカンやん」は、今でもしっかりと心に刻まれています。

思えば他にもいろいろと怒られています。その全てに温かさがあったからこそ、私の中で嫌な思い出として残っていないのでしょうか。

ですが、これでは私の『前山小学校の思い出』が怒られっぱなしなので、それ以外の印象的だった思い出をあと一つ。

現在もあるのかわかりませんが、地区ごとで一人暮らしをされていたご高齢の方のお宅に訪問し、交流するという時間がありました。折り紙を折ったり、手紙を書いたりして準備し、下校の際に訪問してプレゼントする。茶菓子を出してくれて、お話をしながらいただいたりすることもありました。あの時の雰囲気や、お爺さんお婆さんの嬉しそうな表情が深く印象に残っています。

そんなささいで尊い出来事で彩られた前山小学校での6年間は、他者への思いやりや、地域社会との関わり方を、時間を掛けて丁寧に教えてくれたのだと、この文書を書きながら感じました。

30歳になった今、子どもの通うこども園の行事や、地域行事に参加する中で、先輩や後輩、同級生と再会したり、小学校では6学年差以上でかぶっていない方と新たに知り合ったり、両親と同世代の方、さらには祖父母と同世代の方とお話する機会もあつたりと、各世代の人と関わるが多くなりました。その中で、これまでの前山に思いをはせ、これからの前山を考える時間も増えました。これまでの前山っ子も、これからの竹山っ子も、ここ前山でつくっていく思い出が明るく楽しいものになるように。遠くで暮らす前山っ子も、たまには帰ってきたくなるような、そんな地域づくりに、私も一前山っ子として携わっていきたいと思います。

最後に、私から未来へ羽ばたく竹山っ子たちへ、恩師からいただいたこの言葉を贈ります。
「全部食べたならアカン」

